
E n d R o l l とコンティニュー

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End_R011とコンティニュー

【著者名】

タナカ

N4559Z

【あらすじ】

俺、こと白雪燕斗は気付いたら草原にいました。それから、自分を神だというキャラ男に俺は死んだと聞かされました。なにそれこわい。…そういえば身に覚えが…。その自称神がいうには、俺は生きるときに大きな間違いか罪を犯したようです。一いちばん身に覚えがありません。どうやら俺は違う世界に転生して、その間違いだから罪とかに気付かねばならないようです。意味わかんねえふざけんな。

氣付いたら草原にいました。（前書き）

転生モノを書きたくて始めました！ 特にチートな能力を初めからもつてているわけではありませんが、なにとぞお付き合いをお願いします。

気付いたら草原にいました。

俺、白雪燕斗しらゆきえんとは、死んで、何故か美しい大草原に囮まれた花畠に来ていました。

……いやいやいや待て、いや待て。落ち着け、素数を数える。違う、これは何かの間違いだ、もしくは夢だ幻覚だ白昼夢だ。あれ、白昼夢ってなんだつけ？いや、この際そんなことどうでもいい。どうでもいいんだ。重要なのは、どうやってこの夢から覚めることか、だ。はい夢！　はいこれ夢！　むしろ夢じやなきや困る。歩いてバスが突っ込んできて爆発とかそんなのありえない。そんなの普通だったら死んでるし。死んでたら今のこの状態なんなんだよって話だ。俺は死んでない。当たり前。そう、これは夢。だから覚めろ。まじでお願いします。覚めてください。

「いやいや無理無理ー」

びくっと、いきなり後ろから声をかけられた。え、このパターンなに？　なんで俺声かけられてんの？　はは、まさかこれ神様つていうやつ？　ははは、まっさかー？

おそるおそる振り返る。そこには軽そうなホスト風の男。シリバーアクセサリーを首やら手にじゅうじゅう巻いている。全体的にキャラ男にしか見えない。

よかつた、お約束みたいな展開じゃなくて。

「燕斗くん、残念だけど俺まじ神様」

「なに言ってんですかんなわけないですよー。こんな俺の夢に過

ぎないんですから。そういう、夢じゃなきゃいけないんですから」「現実逃避も甚だしいよー？」はつきりと事故の瞬間覚えてるんだ

から諦めな？人生諦めが肝心って言つじゃんか？」

「その人生終了したらどうすんりやいいんだあああつ――――――

「まあドンマーリ」

「つづぜえええええええつ――――――――――――――

きらり、と白い歯を見せてくる嫌に爽やかなチャラ男（自称神様）。無駄に顔はイケメンと呼ばれる部類だった。夢だったら正直美少女が良かつた。

「美少女の神様は今別件で仕事中なの！ 神様も暇じゃないんだよ？」

「はあ…、あれ？ なんで今考えてる」とわかつたんですか？」「

「そりゃあ神様だもの」

「だからこれはゆ」

「夢じやないよ？ もう認めたら？ 覚めない夢があると思つてる

？」

シビアなことを言されました。笑顔で、俺にとつて全力的に絶望的なことを言されました。

「…本当に？」

「本当に」

「まじで？」

「まじで」

「…現実」

「まあ現実だね」

「…俺死んだの？」

「死んだよ。あっけなく

がくり、と膝から崩れ落ちる。

まじか。まじでか。夢でも幻覚でも白日夢でもなくて、現実。リアル。三次元。

俺は死んだ。

バスに轢かれて。

とりあえず回想。

「えーと、次は玉ねぎに、にんじん…、あとじゃがいも…」

片手に買い物袋を下げた俺は、近くのスーパーでいつものように買いたい物をしようとしていたけれど、急に今日、少し離れた方のスーパーで大安売りがあると主婦の方に聞いたので、そちらの方にいそいそと向かっていた。

なぜ青春真っ盛りの男子高校生が、そんなことをしているかというと、理由は簡単。母親がいないためだ。

父親は仕事。同じくすでに成人した姉もだ。結果的に残ったのは自分だけ。初めは姉がやっていたはずなのにどうしてこうなったか。姉が怖いので逆らえないが。

「ふふふん、ふーん」

恥ずかしい限りだが、主婦（主夫？）業がはつきり板につき、むしろ体に染み込んでしまっているので、大安売りと聞いてご機嫌で鼻歌までも歌いながらくてくと歩いていた。

後ろの方からなぜか騒ぐ声とざわめく雑音などを気にもせず、上機嫌だった。今日はカレーにでもするかな？などと考えていたとき、本格的な悲鳴が聞こえた。

振り返れば、すぐ目の前にある大型のバス。運転手は青い顔をしていて、目は大きく開かれている。耳障りなエンジン音と共にスローモーションのように流れていいく景色。逃げようにも、自分のすぐ後ろは壁だった。

俺に向かつて突つ込むバス。怒号のように響く悲鳴。熱い痛み。瞬間轟く爆音。

何も考えられなかつた。テレビのスイッチを切るように、俺の意識は途切れだ。

回想終了。

「……」

「どう？」

「現実か」

「うん」

「……今日の夕食どうじよひ?」

「混乱してゐるね」

親父達ご飯どうするんだろう。姉貴が家事できるから大丈夫だろうけど材料あつたつけ？ 確か米はあつたからいいとして、昨日の残りの炒め物は残っていた気がする。そういうえば牛乳がなかつた。姉貴は朝いつも飲むから買つてないと殴られるんだよな、失敗した。豚肉とほうれん草はあつたと思うから、豚肉のほうれん草和えが出来るかもしれない。卵も確かあつたはずだ。なんとかそれで満足は出来てほしい。

「…そもそも君もう死んでるんだからそんな心配しても意味ないんだと思うけど」

「人の頭除かないでください。結構深刻な問題なんですから」

「そうなの？…俺としては早く説明に移りたいんだけどなー…、
これからのこととか」

「これからって…、俺に『これから』はないでしょ？」

「そういうわけでもないんだよねー…」

死んだということは人生の打ち止め。そのはずなのにこれからがある？ 困った顔をしている自称神。どうしたことだ？ と俺が問うようにじっと神を見ると、苦笑して言葉を続けた。

「君はまたやり直しが効くんだよ」

「…はあ？」

「君が死ぬのは間違いだった…、本来なら、あの時に死ぬべきではなかつたんだ」

どうしてだかわかる？ と聞いてきて、迷わず俺は首を振る。だろうね、と神は眉をハの字にして笑つた。

「君は今まで生きてきた人生において、大きな間違い…もしくは罪を犯した。そして、君はそれに気付いていない。本来ならば、それは生きていくうちに償わしていくものなのだけ…、君は途中で死んでしまつた」

「…は？」

俺の口から変な声が漏れた。ぱちぱち、と大きく瞳が瞬く。

待つて、待つてくれ。大きな間違い？ 罪？ 何を言つ。俺はいたつてクリーンだ。真面目に生きてきたし歩道もされたことがなれば学校で問題を起こしたこともない。それこそ何かの間違いだ。

「ちつちつち、そういうわけでもないんだよねー…。大罪こそが人の性。^{さが}持たない人間などいないんだよ？」

…まあ、つまり要約すると、君はあの時死ぬはずではなかつたのに、なんの因果か命を落としてしまつた。死んだ魂は普通なら輪廻の輪を潜り、新たに生まれ変わる…はずなんだけど、そういうわけにもいかない。

君はもう一度、生きなければいけないんだ」

「…意味が理解できないんですけど…。だって俺、もう死んでるじやん。悪いことした覚えもないのに…、どうこいつことだよ」

「つまり、君をまた違う世界で転生させ、また人生を繋げるのさ」

「……は？」

間抜けな声一回目。

一瞬耳を疑つた。何言つてんだこの人。転生つて…転じて生まれる？　はい？　ホワッソ？

「残念だけど元いた世界の君は死んでしまつたからね、違う世界で新たに生きていいくしかないんだ。君はまだまだ若いから大丈夫。もしわからぬことがあつたら教えにいける。なんてつたつて俺神様だし」

「い、いやいや…話が見えないんすけど。ちょっと待て…、転生つて…」

「君は死ぬのが早すぎた」

ふつ、と自称神が真面目な顔をする

「燕斗、さつきも言つたように、君は大きな間違いか罪を犯した。それは本来ならば生きているうちに償わねばならないこと。しかし君は死んでしまつた…」

「あ、待てよ…？　もし、俺にそんな間違い?とかがあつたとして、こうやって転生する必要があるんだ？　そこまでして、償う？　…なんで？　俺、そんな悪いことをした覚えがないんだけど…」

「やうやく、どうにもならないような悪人の魂ならば輪廻することさえ出来やしない。けれど君のはそんなものとは大きく違っているんだ。そして、それを君は自分自身で見つける必要がある」

そこまで真面目な顔で言つてから、からり、と今度は普通の青年、いや間違えた。チャラ男のようにからりと笑つて俺を見た。しゃらしゃらとシルバー的なアクセサリーが音をたてる。神様なら外せよ。

「まあ、気楽に考えていいや。正しさとか罪とか、それは人がいるのなら自然に生み出されること。新たな人生をエンジョイしようか！ みたいな感じですか？」

「……かつるいなー……」

「重くても困るっしょ？ まあ転生先なんだけれどね……、ねえ君、ファンタジーって聞いて何思い浮かべる？」

「……は？ そりゃあ冒険者とかモンスターとか……」

「うん、つまりそこに行くの」

「…………は？」

「さつてねー……それと……」

「待て。おい待て。すごく待て。はい？ どうこうこと？ 今結構衝撃的なこと告げられた気がしたんですけど」

「いやさー、世界つてのも結構たくさんあってさー、んで君が行くところがそこ。変えることは無理だからねー」「はーはーーー？」

「言語機能は大丈夫。文字も変換されるようにひゃんと読み書き完

備だよ？ まあゆつくりやればいいさ。頑張れ？」

「ま、待て！ え、俺そんなファンタジーなどこの行くの決定？ まじで？」

「まじでー」

「かつるー？ 僕のこれから先の人生すげーかつるい調子で言わ

れた！？」

「いや、こういづのはノリで突っ走っちゃつた方が楽なんだよね？
深く考えたら負け負けー」

「え、えええつ！？」

「こいつ恐らくすっげえ重要なことをノリで突っ走れとかなんとかい
いやがつた！？本当に神様かこの男。

「無理無理無理、俺普通の男子高校生ですから、そんなとこ行つて
も生き残れない。あ、でも、お前なんか神様なら強い能力くれたり
は…？」

「しないよ？ 神様が大体チートな能力をくれると思つたら大間違
いだからね？」

「どちくしょうがー！」

「そうだよな！ そんなんご都合設定あつたら苦労しないか！ 無理で
すよね！」

「君の目的は自分の過ちに気付くことだからね…、もし気付いたと
きには新たに選択できるよ？ この世界で生きることを終わらせて、
元の世界の輪廻の輪に戻るか、それともこの世界で生きていくか」

「…なんだよそれ」

「そもそも世界と言づのは別次元のよつなものだからね。早い話三
次元と一次元を思い浮かべてみなよ。まさか自分が一次元で生きて
くなんて思わないでしょ？ つまり世界そのものが違うからね、輪
廻の輪もまた別々なのさ」

「…そーですか…」

もう説明をいちいち聞くのも面倒くさい。結局俺は違う世界で生き
ていくことを逃れられない運命のようだ。

「まあまあそんな気落ちしないで…、というかさ、君もともとスペック割と高くない？ ほら、家事万能、運動神経抜群、喧嘩も強くて、勉強はそこまで出来るわけじゃがないけど頭の回転は速いし。本当リア充爆発しろとか思われるよ絶対」

「…そんなもん、モンスターが現れたら簡単にやられるじゃねえか

…」

「そういうわけでもないよ？」

…そういうわけでもない？ 僕は自称神の言葉を聞いて、顔を上げた。自称神はふふん、とむかつく顔で笑っている。

「いい？ ももも世界 자체が違うんだよ？ 星が違うとかそんなじやなく、そもそも次元が違う。つまり、元いた世界の法則は通用しないってこと。理だつてまつたく違う。魔法だつて飛び交うし、剣も交じり合つ。そうぞ、君にとっての異世界なのだからね」「…世界が、」

「うん。それとね、その世界の人たちはみんながみんな魔力を持っている。だから君にも『魔力核』を転生するときには入れておく。いわば魔力の種。それがどうなるか、どう育つかは俺だつてわからない。神様はいろんなことを知ってるけど、未来は見通せないんだよ。つまり君は強くなる可能性だつてある」

「…」

「…どうしたの？ さつきからおとなしいけど」

「…なんかいろいろ言つてゐるけどさ、総局のところ…、無事は保障できない、だろ？」

「…………、うん」

「どうくじょうがあああああああ…-----」

自称神が言つには、言語能力と魔力核だけはあちこち同一のものと

する、らしかつた。言語能力は正直ありがたいけれど、魔力核の方はようわからない。

自称神いわく、どうにも変化する、ということでの魔力核が俺に出来て、どうなるかはわからない。もしかしたら強く変化するかもしないし、普通の人と同じようになるかもしない。けれど努力をすれば結果となる。とまあ結局のところ先のことは知一らねつと投げ出されたわけだ。とりあえずこの神は語尾にをつけるのが趣味なのか。うざくてたまらないのだけど。

「まあ、そろそろお話も終了かな？　さて、君を違う世界へと転生させれるよ。…あ、面倒くさいからここのままでいいよね？」

「…もう、どうでもいいです」

「あ、そうそう転生してくる人もう一人いるから。仲良くねー？」

……はい？ 初耳ですが。

目覚めたらやはり異世界。

何かを叫んだような気もするが、それなのに俺の声はだんだんと小さくなっていく。あれ？ なにこれ？ と思つが、それは声が小さくなつていつてゐるのじゃなく、俺の意識が遠のいているからだと気が付いた。

なんだか、死んでいくときと似たような感覚がして、ぶつん、とリモコンでテレビの電源が切れたように、おれの意識が途切れた。

まず、俺の今までの人生を見直してみよう。

母親が幼いときに死んで、親父も姉も酷く泣いていた。そのときに俺は思ったのだ。『この人たちを守ろ』、と。

：守れてねえじやん。俺死んじやつたじやん。そ、それはいいとして！ よくないけど！

つまりそのときから俺は努力するよくなつた。勉強の方面はあまり向かないし、姉の分野（弁護士を目指してた）だったので、体力をつけて家のことをして、将来は働きに出ようと思つていた。

親父は母親が死んでから、俺達のために必死に仕事に取り組んでいて、たまに倒れることもあつた。けれどそのたびに体が強化されて、いつてるらしく、この前チンピラに絡まれてる女性を助けたらしい。どこのヒーローだ。しかもその際に女性に惚れられたらしく、何度か迫られてるのを見た。しかも同じようなものを違う女性で。どこのフラグメーカーだ。まあ、親父は母親一筋だつたらしいけど…、

つて話逸れた。

つまりそんな親父の様子を見ていた俺は、ひたすら頑張った。親父みたく、家族を守れるように。三人しかいないのだから。だからこそ家事も進んでやった。…最近はむしろ楽しくて料理権は全部預いてるけど…。ついでに親父を見習つて、少なくとも変な輩からは大事な人を守れるように力もつけた。そしたらどこからか俺が不良だつて噂が流れたけど…。そのことについては姉に腹を抱えて爆笑された。ちくしょう。

部活は小学校から陸上部に入っていた。ここだつたら運動も出来るし、走ることだけしてればいいしそこまでお金もかからないと思つたからだ。：実際は遠征費やら何やらしたが…。そしたらいつのまにか走力が群を抜いていた。やることなくて走つてただけなのになぜだ！？ ちなみに大会で優勝したこともある。

…つまり自称神が言つていた高スペックというのは、全て家族のために頑張つたものなのだ。

こんな俺が別世界に転生とかありますか？ 今頃親父と姉はどうしてるだろうか、と考えると胸が痛くなる。結局のところ、俺は家族を置いていつてしまつたし、もう守れない。そう思つたびに泣きそうになつた。思春期ぐらいの年だが俺はやはり家族が大好きなんだ。親父、姉ちゃん、死んじゃつてごめん。

自称神が言つていた自分の間違いか罪をさつさと見つけて、こんな世界とオサラバするか、と俺はそう考える。だつてそうだろ？ こなんいつ死ぬかわからない世界より、あの世界の方が良い。もう、親父達の元へと生まれることは出来ないと思うけれど、あの世界は暖かいものがたくさんあったのだ。

死んだ母親のぬくもり。親父達の笑顔。友人達との騒ぎ声。

今考えると、それはとても大事なものだったのだ。早く、早く帰りたい。

帰りたいんだ、俺は。

「...ん？」

目を開けたらそこは、先ほどまでの草原ではなくて、ましてや見慣れた天井でもない。

木々に囲まれた雲一つない青空。太陽の日差しが葉と葉の間に入り込み、緩やかな木漏れ日となり、俺を照らしていた。

息を吸うたび清純な何かが体を通り過ぎていくようだつた。

ビバ・異世界。

はいはい俺落ち着け、さつき説明を散々聞かされただろ？ 落ち着け落ち着け落ち着け。息を吸え、吐け、大きく深呼吸だ。ここは空気が綺麗だからな、吸つて、吐いて、吸つて…、ほら、気分が落ち着いてきただろ？ 大丈夫だ白雪燕斗。俺は出来る子だ。ほら、状況確認？ 頑張れ俺、すごく頑張…、

！――――――

……俺は悪くない。俺は悪くありません。普通の感覚ならこうなつてもおかしくないはず。

「まじか、まじで異世界か？　夢でもなくて？　やつぱり現実…？」

試しに頬を抓つてみた。痛かつた。現実であり夢じやない。自称神に言われてたことだつたが、さすがに目の前に現れると戸惑うし、驚く。それに恐怖もある。見知らぬ世界に、頼れる人もいない中で一人ぼっち。まじでか。

うわあああ……と頭を抱えて、大きく息を吐く。そのとき、「ふと、もぞり、と動くものがある」ことに気付いた。

どうにも上ばかり見ていた俺だったが、それは、俺のすぐ近くの真後ろにある、なんか生暖かいの。

……え、モンスター？

一気に血の気が引く。確かにモンスターもいる、と言つていた。でも、いきなり？　俺倒せると思えないんだけ??

ぎぎぎ……と油の差してないロボットのように振り替えると、そこには白い着物のようなもの見えた。

「は……？　人……？」

氣を落ち着かせてもう一度見れば、それは神社の神主が着てるような服を、動きやすくしたような感じで…、狩衣、と言えばいいのか？　つまりそんな感じの服装をしている、人間、だった。

その瞬間、自称神の言つていた言葉を思い出した。

転生してくる人は、もう一人、いる。……。

もしかして、と思い、その人間の顔をまじまじと見ていた。
多分同年代。明るい茶色の髪で、所々飛び跳ねている、といつか横
跳ねの髪型だ。頭部の後ろを見ると、案外長い髪をしているらしく、
下のほうで縛られていた。

「日本人、なのか？　この衣装は和風っぽいんだけど……。
そう考へてみると、その狩衣を纏つた人間の瞳が、開いた。

「こんにちは」

「……？」　状況を掴めていない。

「あ、おはようございますなのか？」　「ううう」場合は

「……」考え中。

「お前もあの自称神に会った？　あのチャラそうなの」

「……？」　混乱中。

「ところでここ異世界なのかな……、見たところお前も転生してきた
人間だよな？」

「……！」　思い当たる節を見つけた。

「まさか本当にモンスターとかいたらどうすりか…お前戦える？」

「……っ！－！」　思い出した。

「……どした？」

「！」本当に異世界……？

「あ、やっぱりお前俺と同じか」　平然。

俺は人がいるとなんとなく気も落ち着いてきた。こういうときコミ
ユ力大事。…あれ？　違う？　まあなんでもいいが、似たような人
がいるというのは、案外支えになるものだ。

「え、嘘…本当に来たんだ…。これは、喜ぶべき…？　いや、悲し
むべきとこうこと…？」

「おいお前なんていうの？ 名前
「え、へ、な、名前？ て、ていうか何でそんな落ち着いてられる
の…」

「いやせつとき散々驚いたけど…」

そりやあ驚いた。凄まじく驚いた。限りなく驚いた。実際叫んだし。
だからそんな変なものを見るような眼で見ないで頂きたい。
見た目ではあまり見分けがつかなかつたがどうやらこいつは男らし
い。瞳は俺と同じく黒色だつた。なんだ、普通に日本人っぽい顔立
ちだ。

「俺は白雪燕斗。お前は日本人？」

「にほんじん？ …俺はそんな名前じゃないよ、忌月、それが俺の
名^{きげつ}」

「…日本人じゃない…？ 苗字は？」

「苗字？ そんなの位の高い人間がつけるもんだろ？」

「え、お前どこから来たの？」

「香耶の国、列峰領^{れっぷう}の治める…」

「もういい理解した」

こちらも違つファンタジーなのか。

田原めたりやはり異世界。（後書き）

同じく転生してきた人は男でした。

魔女と出合いました。

「…それで、これからどうぞ」

忌刃と名乗った男に問いかける。自己紹介を済ませてからじどりやら同じ年だったところがわかった。身長は俺のが高い。そのことに優越感を覚えつつ、これから先のこと話を話し合おうと口を開いた。

「あのキャラ男、本当に放り出してきやがって…」

「ちや、ちやらお？」

「あー…あの自称神。軽そうな男」

「…神様？ 神様は女だったよ？ しかも綺麗な人だった

…なんですか…？」

「ま、まじで！？」

「え、食いついてくんの！？ あ…ああ、なんか『別にあなたのた
めなんかじゃないんだからね…』って言われた」

つ、つつつつつつつつシンドレ…だと…！！！ 俺のところはあの
自称神とかいうキャラ男だったのに！？ 理不尽だ！

…あれ？ でもそういえば、美少女の神は別件で仕事とかなんとか
…。…まさか…。

「お前が！ お前方が！ お前方に行つてたからこっちに来な
かつたのか！ 謝れ！ 全身全靈をかけて謝れ！」
「え、ごめん…、じゃなくてなんでいきなり怒つてんの…？」
「ちくしょう…！ 僕だって美少女の方が良かつたさ…！ あんな

チャラ男に笑顔で君死んだよとか言われて腹立たないとかおかしいだろ！？ だろ！？」

「へ…へえ…よくわからないけど、その、ちや、ちやらお？ が気に入らなかつたわけだ…、つて俺に八つ当たりすんな…」「しなくちゃこの荒ぶる気持ちが抑えきれねえ！！」

「知るか！」

ちくしょう！ 俺も会いたかつたよ美少女！ 調理実験のときに女子より手際よくてしかもいいとこ見せようと飾り切りまでくりだして、最終的に全部自分で作つたら白い眼で見られた俺だよ！

男子に女子より女子力高いんじゃね？ と褒められて、女子には先ほど言つたとおりの目で見られて…、俺のハートは粉々でした。これでも俺だつてモテてみたいと一般的な男子の欲求はあるんだ！

「だいたい、俺はなあ、もつと女子と…」「しつ…」

さらばいろいろ文句を言おうとしたら、いきなり口を塞がれた。はあ！？ と思わずその手をとろつとしたが、どうにも忌月の様子がおかしかつた。

よくよく考えてみると、俺は今叫んでいた。イコールそれは大声だつた。イコールそれは周りに響くというわけで。しかも、この世界は、ファンタジー。言つてみればそりゃあモンスターがいるらしく。

「……っ！」

今更自分の失態に気付く。こんなわけわからない場所で大声出すなんてありえない。馬鹿か俺。背中に冷や汗が流れ、体温が下がつていぐ。

ちくしょう、気付くべきだつた。ここは異世界。ここルールが何

なんてわからないし、わかるはずもない。だって俺はここに転生してきたばかりだからだ。…言い訳になるな、これ。

がさがせとこちらへ近づいてくる音がする。それは確實にこちらの方へ向かっていた。自然に体が緊張や恐怖により強張った。忌月の方も同様だった、けれど瞳の中に鋭いものを蓄えている。

…あれ？

そのとき俺はどうしようもなく、違和感を感じていた。それは特に説明がつかないが、どうにも、違和感というか、不自然だというか…とにかく曖昧なものだ。

けれどガサガサツという茂みの音に、その思考は途切れる。来るか…？ と身構えたそのとき、

「おや？ そなたら人間か？」

やけに高いモンスターの声だ。…ん、あれ？ 違う？

ぱつと声のした方を見るど、そこには緑色のローブを地面で引きずりながらこちらへ寄つて来るピンク色の髪に紫色の瞳。うん、ファンタジー。ってそうじゃなくて、え？ どういうことなの？

その人はどうにも幼い顔立ち＆身長で、小さい子供のようだ。けれど喋り方がおかしい。子供らしくない。その子供らしくない幼女？ は俺達二人を左右見て、それから顔を赤らめる。

…赤らめる？

「いや…わしがそうこうとに偏見など持たん、邪魔して悪かつたのぉ…」

…ん？

ちょっと待て、俺達の今の体制を確認してみよ。

俺 先ほどまで文句を叫んでいたため若干忌用の方へ乗り出し、顔も随分近い。

忌用 茂みの音に気付いたため、俺の口を塞いでる。

…総合して、考えると……、

「ちひがああああ う…！ 俺はそんなアブノーマルな趣味持つてません！ 違います！ 本当に違います！」

「は、え？ あ、あぶのーまる？ なんだそれ？」

「…なに？ おぬしらはこの森の中で事に及ぼうとしてたわけでは…？」

「そんなことあるか…！ 俺は女の子… 女の子が好きなんです！」

「そう呼ばれても困るのじやが…」

「『めん俺理解できてない。誰か説明して』

そつぱりわかつてない忌用は置いといて、俺は幼女に慌てて近寄る。

「俺達、ここよくわかんなくてさ…道もわからんないし、ここひくんに家つてないか？」

「わからなー…？ …ひひひ… おぬしら、わしことわかつておるか？」

「ん？ なにが？」

「わしこの深海の森の大魔女、ウェイブ・マーガレットじゅざー…」

「…魔女？」

魔女、魔女、魔女…、まさか、あの？

「あ…」

「あ？」

「握手を…」

「……」

あれ？ 僕なに言つてんだ？

なに言つちやつてんだ！？

なに言つちやつてくれぢやつてんだ俺！？

「うわ、わわわわわ、すいません、俺魔女つ娘とか考えてないです！ 違います！ 萌えとかそんなのと違いますからー。」

「違うのか？」

ん？ なんで残念そうなんですか？

「盛り上がりがつてるとこ悪いんだけど、お嬢さん、出来ればこじれいか教えてほしいんだけど…」

「お嬢さんではない…。ん？ なにやらおぬし、ぽっかり抜けた

ような力があるな」

「え、わかります？」

「…なんの話だ？」

話に入ってきた忌用を見たウエイブは、なにやら変なことを囁く。それをせらつと受け止め、むしろ理解してゐるような口調だ。訝しげに見ていたのに気が付いたのか、忌用が慌てて俺に教えるように言った。

「俺、死ぬ前は靈媒師だったんだよ」

……なんですか？

魔女と出会いました。（後書き）

衝撃の事実なのかなんなのか…。ちなみに魔女様は美少女です。

回じ転生者は靈媒師。

「れ、靈媒師？ 精霊師つて…、あの、靈とかなんやら祓いやつ…？」

「ううだけど…君の世界にはないの？ 俺のいたところじゃ、一般的な職業だつたんだけど…」

「そ、そんなサラリーマンみたいな扱い！？」

「あ、さらりいまん？」

そうか、よくよく考えてみれば忌月は日本人というわけでもない。いくら顔立ちが俺の元いた世界に違和感ないものだと思つても、こいつもまた違う世界にいた。俺の常識の中で通じるものも、他ではまったく適応されないので。

それに忌月だつて俺の主にカタカナで使われている言葉に反応していた。年も同じだから、ついまつたくわからない、という顔をしながら言葉を反復されるたびに俺はようやく気づくのだ。ここは日本じやないと。

それにはどうやら言語機能も若干の差異があるらしい。現にウェイブには通じているよつに見えた。『アブノーマル』とか…、いかん、考えるな考えるなおぞましい。おつと話がずれた。

「まあ、そういう『靈力』つてのが俺にはあったんだけど、この世界に来るときにはすっぽり抜けたつてわけ。まあこの世界にある魔力？とはまた違う力だからしじうがないとは思つたんだけどね」

「そういうのがあるのか…」

「まあ別に俺はどうちでもいいんだけどね？」

そういう忌月の顔は後悔も何も無いように見える。いや、むしろ嬉しそうなような…。まあ確かにこの世界にとつて異質なものはない

ほつがいこだわつ。皿立つてもしょ「うがな」

「違ひの世界、…？ やせつおぬしきの世界のものでせないのか？」

「え」

「え」

「…なんじやその反応は」

いやいやこやせ聞話のよつに詰われましたよウロイブわざ。俺と彌月は顔を見合わせる。

「…わかるもんなの？ ルウコウの」

「普通の人間にさわからんじゃろ。 時間がたてばおぬしきの世界に染まるじやうが、いかにも臭いが違つ」

「こ、臭い？」

「昔にもせうこつものがおつたからのお…、150年くらこ前じやるつか…」

「ひや、ひやベージュのねんつ…？ 前こべつだよー」

「ん？ 今年で324歳になるの」

「へへつ…？」

なんてこつた。300歳越え…だと…？ 確かになんかの物語で魔女は長生きだと聞いたことがあるけど…、こんな幼女が？ まじか？ まじですか？

ちなみに彌月は、「だからそんなに口調なのかな…」とかなんやら言つてゐる。突つ込みビリがずれてゐる。

「まあかなり珍しいことに違いないからな。特にその黒こ皿はあまり見かけん」

「やっぱり青とか緑とかオンパレード？」

「お、おんぱりこど…？」

「そりじゃな。まあかといつて珍しい、というだけじゃ。気にせずともよいと思うぞ？…立ち話もなんじゃ、おぬしら、わしの家に

でも来ぬか？この世界のことを教えてやる」

「本当！助かるよ、う、うえいぶさん」

「…本当お前力タ力ナつぽい言葉苦手だよな」

「かたかな…？な、慣れるから！そのうち慣れるから！」

忌用と軽口を言い合いながら歩き始めたウェイブについていく。その間にも少しだけ説明を受けた。

まずはこの世界は魔法が普通に存在する、ということだ。この世界に存在する人間は魔力核、というものを持っていて、それを育てることで魔法の力を上げているらしい。まあ、魔力核と言うのはある自称神に受けた説明どおりだ。

魔力核は人によって千差万別十人十色。つまりそれぞれ違うらしい。似たようなものはあっても同じものはない。人によって成長速度が違つたり、容量が違つたり、属性が違つたり…、ちなみに属性と言るのは、炎、水、風、土、雷、風、闇、光、そのどれにも属さない（筋力強化などの魔法）無ということらしい。合つた属性以外が仕えないわけではなく、国語より数学、音楽より家庭科、のように自分に合つた、ということだ。つまり全属性をこなせる人もいるということもないこともない。

魔法を使うときに必要なものは魔力とイメージだ、とウェイブは言う。初心者には魔術書などというものがあり、そこには詠唱の言葉と共に魔法が載っているらしいが、詠唱は実際どんなものでもいい、一番大切なことは魔力を形にすることだ。そのときに詠唱と言うものは必要で、形のない魔力を整える、まあ例をあげるとするならば粘土をこねて像などを作るようなものらしい。簡単なものならば詠唱は必要ないらしいが、魔法を得意、もしくは魔力が少ない者、魔力をたくさん使う魔法には用いられる。

「…出来そうか？」

俺はとりあえず毎日尋ねてみる。

「んー、俺は死ぬ前は似たようなもんで飯食つてたわけだし…、君のところじゃそういうのなかつたんだろ？ 君こそ大丈夫なの？」

「料理洗濯掃除なら大得意なんだけど…」

「…それは女人がやるものじゃないの？」

「あーそれは女性差別なんだぞ？ 学校で習わなかつたのか！？」

「な、なんていきなり怒るんだよ！」

「うるさいの…、静かにしどらんとモンスターが襲つてくるやもしれんぞ？」

「もんすたあ？ なにそれ？」

「怪物とか妖怪みたいなもんだよ」

やはりカタカナ的な言葉は苦手なようだ。口調は普通なのだけれど、

どうも年が食い違つてるように見える。

なんとなくそう思つてるとウェイブが指差しながらこちらを向いた。

「あそこがわしの家じゃ。それじゃあこの世界のことを説明しようかの」

魔女の家は案外普通。

魔女の家、といつて、少々身構えていたのだが、そこはビリにもイメージと違つて小奇麗なものだった。もちろん魔女に付き物？な壺や杖はあつたのだが、壺は中身は入つておらず空だし、杖だって艶やかな羽とか、毒々しい紫の水晶玉まくつついてるわけでもなく普通の木の杖だ。その代わり本が本棚に限りなく詰め込まれていて、それは地面にも積み重ねられる程だつた。けれどきちんと計算されているのか、それは邪魔ならない程度にあるのであって、やはりイメージとは異なる。

なんというか…書斎のよつな。ウェイブが普段使つているらしい机にも同じように本が積み重ねられていて、他にも資料らしき紙が無造作にばら撒かれている。あちらの方が余程汚い。

こちちじや、とウェイブが招くところは客室のようで、これまた普通という形容詞が正しいものだつた。いや、日本と比べてはどうしたことなく昔の外国？ヨーロッパ辺りの古い家に似た感じだ。

「座つて待つておれ、紅茶でいいな？」

「ああ」

「こうちや…？　お茶、だよね？」

「なに言つてんだ、座ろうぜ？」

「え、そうやつて座るの？　畳とかはないの？」

…こちらの方もいろいろあるよつだ。俺基準にしてみれば、この世界も大体のこと（例えば家とか服とか）は俺のいた世界と似たよつなものではあるが、忌月にしてみればまた違うらしい。

畠と言つたけれど、やはり忌月は昔の日本に似た世界から来たんだろつか…、服装だつてやはり狩衣にそっくりだ。かといって教科書でしか見たことがないんだけれども。

「ここで紅茶が存在しているように忌月がいた世界に置だつて存在していてもおかしくない。俺の耳が翻訳されているだけで、実際の名稱は違うはずだ。これはあの自称神に感謝しなくちゃなるまい。

「そういうえば聞いてなかつたけど、お前どうして死んだの？」

「…え？」

「いやだから、お前も死んで異世界に来たんだろ？　なんで死んだのかなつて」

「……」

「…忌月？」

「たいしたことじやないよ！　え、えんぢ…？　だつけ？そつちはどづしたの？」

「Hンドリってなんだよ俺終了しちゃつてるじやねえか」「

あからさまに俺に話題を移した忌月。よくよく考えれば自分の死んだ経歴なんてあんまり聞かせたくないわな。デリカシーが足りなかつたかもしれない。

「俺はトラックが突つ込んできてそのうえ爆発して死んだ」

「寅が爆発…？　痛そうだねそりや…」

「食い違つてる気がするけど気にしないでおこう」

カタカラナはそのまま伝わつているわけか…、なんか言語能力があつちよりこっちのが高性能…？

『それは俺が有能だからだよ』

…今不愉快な声が聞こえた気がした。気のせいだ。確實に気のせいだ。考えたら負けだ。これだいい。

『向こうの神様がねー、基準を俺と合わせちゃったんだよ。いくら苦手だからってさ。手伝つてつて言つたら手伝つてあげるのに。素直じゃないよね?』

『な、なに勝手なこと言つてんのよ! ベ、別に真似したわけじゃないんだから! あ、あんたの方が、仮に性能が良かつたとしても、その、違くて…で、出来なかつたわけじゃなかつたんだからあ!』

『うんわかってるよお、だからほら、泣かないで』

『な、泣いてないわよ! カ、勘違いしないでよね!』

「リア充黙れ!」

「え、えんどどびうしたの? いきなり叫んで…」

「いや、今お前の言語能力がかなり残念な状況にあるのはあっちの責任だつたみたいだ。だからお前も叫べばいい、『リア充爆発しろ』と…」

「いや意味わからないんだけど」

「あともう一度言つておぐが俺はエンドじやねえ。終了してねえか

『』

「紅茶を入れてきたぞー、キゲツ、エンド」

「ああああお前が言つてるから結局エンドになつちやつてるじやねえか!…」

人生終了して名前も終了つてか! 不吉じやねえかこの野郎!

「いちいち騒がしいのう…、まあ飲みながらでも聞けい、ほひ

「…サンキュー」

「…この取つ手持ち上げるのか…」

「お前だけ毎回ずれてるな」

ウェイブが自分の紅茶を一口飲んでから、ふう、と小さく息を吐き、俺達に向き直る。

「まずはこの世界はアストウリアスと言つたがじや。それでここは深海の森。」の近くにはイベリアという大きな街がある。そこでおぬしらはギルドに登録するがよい

「あらんど…？」

「あー、俺わかるから、説明するから会話だけ覚えて後で俺に聞け」「わかるのか…？」まあそれはいいとして、そこで登録して『冒険者』となるのがおぬしらには一番良いと思うのじや。これは国と国とを行き来することにも使えるし、まあ身分証明書じやな。これが大きく役に立つ。まあギルドとしては仕事を受けるというのが一般的じや。簡単なものからそりやあ難しいものまで山ほどある。そのどつちともに料金はもらえるから。生活には持つて来いじや」「仕事って、どんなのがあるんだ？」

「なに、モンスター退治やら、秘宝を求めてダンジョン攻略するためのパーティ集めやら、引越しの手伝いやら、そうじや、料理人募集のようなものもあるのう」

「料理！　まじか！」

「そ、そんなキラキラした田で食いつくといつかの…？」

料理なら持つて来いだ！　試行錯誤を繰り返し作り上げた究極の味噌汁からフグの調理（こつそり獣師さんにもらつた本体丸々）を完璧に行い、さらには和食洋食中華なんでもこなした。

全てのバイト先でも何度も就職に来てくれと言われたし、それどころかプロの人さえ感激させた。俺ははつきり言える。料理の腕だけはチート級だ。まあ努力も異常にしたけれど。

「…おぬし見てみたら器用さが異常な数値じや。魔力量もそれなりが望めるし…、おぬし案外いい線いくかもしれんのう」

「え、そういうのわかるのか？」

「わしは魔女じやぞ？　そのくらい造作もないわ」

「へえ、俺は？」

「ぬしのはなんと詰うか… もともと呑つた『なにか』のせいか魔力の質が特異じやな。それにぽつかり空いた穴が大きい分、量だけはかなりのものを望めるぞ？」

…なのに貧弱じや。限りなく体力がないえ力もない。走つただけで息が切れるレベルとは…、男としてそれはどうかのう」

「……」

「おい、今こいつに多分クリティカルに精神的ダメージを負わせたぞ？ 人の気にしてるところ突いちゃった感じじやなく抉つちやつた感じだぞこれ」

「まあ話続けるぞ」

「あ、スルーしたこいつ」

どんよりした精彩を欠いた目で、暗雲を周りに漂わせてる忌月さん。そこまで気にしていたことなのか。

「それでこの世界の大体の事情なのだが、数年前から戦争が始まつておる」

「え、そんなヘビーな状態？」

「まあ今は休戦しておるが、どうなるかはわからん。… それに戦争が始まるより、また数年前から魔物の数が増加してきてある。総合すると、まあぶつちやけ あんま平和じやない的な？ … ということじや」

「…ノリが軽いぞ？」

「軽くせねばやつておられん。まつたく人間というものはどうじようもないものじや。今も魔物は増えてきておるといつのに、同じ種族同士で争いおつてのう…、いや、今は亞人やら獸人やらしきぢやか」

「…ちなみに数年前つてのは、どのくらいだ？」

「ん… 戦争が始まったのは百年ほど前、魔物は増え始めたのは百五

十年ほど前じやの「

「数年じゃねえ…」

「戦争なんて下らん」としとる暇があつたら魔物の討伐隊でも組め

ばいいと思ひのじや、なのになぜそれをせぬのかのう…」

「セリヤあ当人達にとづけやくだらないもんじやないからなんだろ
うよ。それぞれが違う正義や信念持つて生きてんだ。それをみんな
が掲げるから争いになるんだよ。結局誰も間違つてないからわ」

そんなことをなんともなしに語つたら隣に座つてゐるこいつの間にか
生氣を取り戻した彌月が目をぱぱぱち、と瞬かせて俺を見た。

「…君と同じことを言つた人がいたんだ」

「くえ、それは素晴らしいケメンなんだろ?」

「いけめん? …麵?」

やっぱこいつの言動面白くなつてきた。

魔女の家は案外普通。（後書き）

地名やらなんやらほんのクラシック曲から使わせてもらったりしています。

アストゥリアス

アストゥリアス（伝説曲）（西語：Asturias（*Leyenda*））は、イサーク・アルベニスのピアノ曲の一つ。元来は、『旅の想い出』作品7-1の第1曲、前奏曲「伝説」（西語：*Leyenda*）として書かれた曲である。

イベリア

イベリア、12の新しい印象（フランス語：12 nouvelles Impressions ? en quatorze cahiers）は、イサーク・アルベニス最後年のピアノ曲。

Wikpediaより。

修行しました。

それから、ウエイブからたくさんのこの世界の常識を知った。

まずは暦。春の月、夏の月、秋の月、冬の月の四つがあり、一月は90日ある。春の月1日、と数えるらしい。地球では12ヶ月で一年だったから、それを聞いて思わず眉を顰めたが、一月が90日だということは30日分が三つ…、ということを考えればまあいいとおもう。合計で360日だし、そう思えば割と近い。

それからモンスター。予想通りゴブリンとかオークとか有名ビックリがうじやうじやといふ。俺の聞いたことのないモンスターの名前もあつたがそれもやはり異世界。異世界だとしても世界は世界なのだ。知らないことがあつたって仕方がない。

「おぬしらがよければいいんじゃが、しばらくここで修行せんかの？」

「へ、どうしたいきなり」

「いや、まだこの世界に来たてであまり力の使い勝手がわからぬじやろ？ 都合のいいことにおぬしらにはおぬしらなりの知識が豊富にあるようじやし、案外強い魔術師になれるやもしれん」

「え、俺ら、魔法なんて使つたことないんだぞ？ なのに大丈夫なのか？」

「それに強い人って小さい頃から鍛えてるもんじゃ…」

「いいや、そんなのは考え方一つ、戦い方一つでどうともなるわ。魔力が少ない人なら少ない人鳴りの戦い方があるように、誰しも得意不得意があるように、確かに経験がないのは厳しいが、おぬしら

にはおぬしらのこことは一風変わった考え方、想像力があるじゃろう？ それにわしが鍛えてやると言つておるんじゃ。いたずらに大魔女と呼ばれておるわけじゃない

「…まあ俺にとつちや願つてもない誘いだけど…、いいのか？」

「構わん。近頃は退屈しておつたしの。それにおぬしらは…面白そうじや」

「？ どうこいう意味だよ」

「そういう意味じゃ。よし、まずはだいたいのモンスターの知識を詰め込まんとのう…」

「え、俺勉強嫌い」

「俺も？」

「おぬしは体力づくりじゃ。せめて一般人には追いつけ。おぬしは記憶力がよさそうじやから本さえ渡しつければいいじゃろ。魔物払いの結界をしておくからまずは十周ほど走つてこい」

「……俺に死ねど？」

「どんだけ体力無いんだよお前」

つまりそんなこんなで、大魔女さん、ウェイブとの修行が始まった。先ほど台詞の中に登場したが、俺は勉強が嫌いだ。自称神には頭の回転が速いなどと褒められたが、勉強は本当に苦手だった。成績は下から数えた方が断然速い。情けないことだけれど、つまり、そういうことだ。：馬鹿なんです。すいません。

一方の忌月は、確かにウェイブの言つた通り本を貰い、ただ読んでいるだけで簡単に覚えていた。だけど体力がおかしい。なんで十メートル走つただけで息切れするほど疲れるんだ。そのうえ顔も青くなるし今にも倒れそうだし、正直ここまでとは思わなかつた。

十日間はお互い苦手分野のことに徹し、ひたすら努力をした。さすがに俺だつてサボつていられないことはわかっている。下手したら死ぬのだ。そういう危険が常に纏わりついている。

ギルドに登録せずに働くことはダメなのか、と聞いたことがある。

身分証明書はすっぱり諦めて。そうしたら、『どこから来たものかさっぱりわからぬ奴をそそう雇えると思うか?』などと返された。確かに俺達にはもう家族いない。いや、生きているのだけれどこの世界には存在していないのだ。それに今頼れるのはウェイブただ一人。だけれどこの魔女が住んでるのは森の奥深く。しかもなにやら『恐れられた存在』らしい。なんだか魔女らしい噂だ。

つまり後ろ盾と言つものが存在しない。いきなりぱつと現れたこんな怪しい奴を雇つてくれるのは相当人の良い人間らしい。じゃあそういう人を探せば、と言うと、『そんなにおぬしは頼れるか?』と。…無理かも。まあギルドには登録するつもりだったし、一応聞いてみただけなのだけれども。

十日たつころには、忌月が一般人並みの体力になっていた。それに俺はすぐ驚いたが、ウェイブがあつさり答える。

「自力じゃもうほぼ無理だったから、魔法でぎりぎりまでそういう筋肉などをあげて、それからトレーニングさせたのじゃがそれであれがもう今出来る全てじゃった」

…通りで落ち込んぐんですね忌月さん。隅で体育座りをしており、背中には暗雲を背負っている。なんとか忌月を立ち直らせてウェイブから今度は『魔法』について学ぶ。

魔法というのは、前にウェイブが言つたとおりそのまま、イメージして鍊つた魔力を詠唱で形作る、という感じだ。本に記されているようなものがたくさんあり、オリジナルで創作できたり、魔法と言うものは無限の可能性を持つていて、という話だった。

まあだが、オリジナルで魔法を作るというのは難しく、確固たるイメージを持ったうえに魔力も大量に消費するらしい。まあ初めて使

「ものだからそういうものだよな。

「…魔法といつものは感情に連動したりする。これは気をつけなければいけない」とじゅ

ウェイブが真剣な顔立ちで言ひ。

「例えば怒りで我を忘れるときがあるじゃろ？　あれは酷く危険な状態なんじゃ。そんな感情から魔力のバランスが崩れ、増幅する。それが放たれれば、相手どころか自分も傷つく。十分用心するんじやぞ？　…まあ人の心はそう無理矢理制御できるもんじゃない。じやが、ちゃんとそれは覚えておれ」

それからまた数十日がたつた。

ウェイブの元で身を守れるだけの力と魔力を蓄えた。魔力はどうやら自然に体力が回復すると共に溜まっていくらしい。うまいものを食べても補給される。そんな簡単なものなのか…と半ば呆れたりもしたが。

魔法も使えるようになった。俺はどうやら異常に器用らしく、案外簡単に出来たので俺自身が驚いた。ちなみに忌月は、元いた世界で使っていた力とどこか似ているらしく、一見どちらも簡単に出来た。
そんなんいいのか？
忌月は魔力？の際に使っていた術を試そうと一人でいろいろやっていた。それを見て俺自身もオリジナルのやつ作ってみよーかな、などと考え、別々に修行していた。

なんとなく、俺は焦つてたのかもしれない。元の世界でまた生まれるため、俺の、『間違い』か『罪』を探す。力をつけた後に、何かがあるんじやないかと。

そして、俺達は今日、魔女、ウェイブの家から出る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559z/>

End Ruleとコンティニュー

2011年12月21日19時55分発行